



営農NEWS



イチゴ栽培でハダニ類が発生しています 早期発見に努め 初期防除を徹底しましょう

イチゴ栽培では、ハウスのビニル被覆とマルチングによる保温が行われ、これから大切な収穫時期に入っていきます。しかし、病害虫発生予報 11 月号（県病害虫防除所）によりますと、10 月下旬現在、イチゴハダニ類の寄生および被害葉率はともに平年並～やや高く、発生地点率は平年よりやや高い状況とのことです。昨年も、ハダニ類の発生が多い状況で経過しましたので、前年に続き被害の見られた圃場では特に注意が必要です。

今後、収穫期に入りますと、収穫・出荷作業の多忙などで、病害虫防除が疎かになりがちですが、ハダニ類の発生を見逃しておくと、急速に増殖、拡散し、多発生すると防除効果が十分に上がりにくい難防除となってしまいますので、常に発生状況の確認と的確な防除対策に努めてください。

イチゴ栽培では今後とも、こまめな温湿度調整など適正な施設環境管理が重要になってきますし、また、高品質で安定した収量を確保するために、ハダニ類をはじめ、うどんこ病や灰色かび病、アザミウマ類など被害を生じる病害虫の発生を常に観察し、早期発見、早期の防除対策を行うことが重要になってきます。

【防除のポイント】

- 1) 初発生を見逃さないよう、葉裏や下葉などを丁寧に観察してください。
- 2) 新葉の展開にともなって、生育への影響がない程度に古葉を順次除去すると、ハダニ類の発生抑制に有効です。
- 3) 初発生を確認したら、早期に薬剤防除を実施してください。この場合、葉裏や下葉にもよくかかるよう株全体を洗い流すように散布しましょう。なお、葉かき後は薬液がかかりやすいため、薬剤防除に適しています。
- 4) 使用薬剤について、交配用ミツバチや天敵昆虫（カブリダニ類など）への影響を確認してください。
- 5) 薬剤抵抗性の発生を抑制するため、気門封鎖剤を除き、同一系統薬剤の連用は避けてください。また、化学合成薬剤の効果が低下している場合は、気門封鎖剤をローテーション薬剤として組み入れることも有効です。

表 1 イチゴ ハダニ類の主な防除薬剤（平成 26 年 11 月 5 日現在）

系統	薬剤名	希釈倍率	使用時期 / 使用回数	ミツバチへの影響日数
I	アフーム乳剤	2,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内	2 日
	コロマイト水和剤	2,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内	1 日
II	スターマイトフロアブル	2,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内	□
	ダニサラバフロアブル	1,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内	□
III	マイトコーネフロアブル	1,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内	1 日
IV	カネマイトフロアブル	1,000～1,500 倍	収穫前日まで / 1 回	□
気門封鎖	アカリタッチ乳剤	1,000～3,000 倍	収穫前日まで / —	—
	サンクリスタル乳剤	300～600 倍	収穫前日まで / —	—

注 1) 表中のミツバチへの影響日数は、茨城県病害虫防除指針（平成 26 年版）より抜粋しました。これはあくまでも目安で、□：影響がほとんどなく翌日に導入可、1 日：散布後 24 時間は影響し、散布 2 日後に導入可などです。なお、天候、施設内の環境条件（温度、換気等）により日数の前後することがありますので注意が必要です。また、—は指針に記載なしです。

注 2) 気門封鎖剤の利用上の注意点

- ① 薬剤により、散布するとマルチの汚れや果実に薬害を生じることがあるため、各薬剤の特性をよく確認して使用してください。
- ② 気門封鎖剤は、直接ハダニ類にかからないと防除効果がないため、株全体に十分量の薬液を丁寧に散布してください。
- ③ ハダニ類の成虫には有効ですが、卵には十分な効果がありませんので、残った卵からふ化した成虫を防除するためには 5～7 日間隔で数回散布してください。

農薬を使用する際は、ラベルに記載の登録内容、使用法、注意事項などを確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040